

持続可能な島づくりを目指して 「サスティナブル・アイランド奥尻」 奥尻町の脱炭素への取り組みに ついて

奥尻町ゼロカーボン推進課

1 はじめに

<奥尻町の紹介>

奥尻町は北海道南西部、渡島半島日本海側に位置する奥尻島にある町です。人口は2,182人（令和6年9月末現在）、面積は142.99km²、海岸線は84kmにおよび対岸檜山海岸に匹敵する長さの海岸線となっています。

奥尻島の古名は、イクシュンシリといい、後にイクシリと転訛したものです。これは、アイヌ語で、イクは向こう、シリは島の意で即ち「向こう島」という意味であり、享保5年（1720年）新井白石著「蝦夷誌」



奥尻島の全景

に初めて「奥尻」と記されています。島は寒暖の2つの海流に囲まれ、豊富な漁場があるほか、初松前と呼ばれる海岸の砂丘地帯には、約560年前松前藩の藩祖武田信広が奥羽各部から来島し、居城したと言われております。明治2年には、国郡設定にあたり後志国奥尻郡となり、その後奥尻村に改め、さらに奥尻町に昇格しました。

奥尻島は、昭和35年4月檜山道立自然公園に指定され、美しい海岸線と温泉、素朴で荒削りの風景が醸し出す多彩な観光資源に加え、昭和57年には、彫刻家「流政之」による彫刻「北追岬」を中心とするナガレパークが整備され、訪れる観光客を魅了しております。

地形は、中央に進むとやや丘陵となりますが、平坦地も多く広い農耕地、牧場や森林地帯もあり、水産業のほか林産、畜産業も営まれており、四季折々の新鮮な魚介類などの味覚がふんだんに味わえるところです。



島のシンボル「鍋釣岩」

<壊滅的な被害を受けた過去の災害>

平成5年7月12日午後10時17分、突然奥尻島を襲った大きな揺れと数分後に大きな津波をもたらした「北海道南西沖地震」によって壊滅的ともいえる甚大な被害を受けました。

この地震では、地震の規模を示す大きさとしてマグニチュード7.8が記録され、揺れの大きさも当時は島

内に地震計が設置されていなかったことから、震度6の烈震と推定されました。これらにより地殻変動による地割れや陥没、建物の倒壊、液状化現象、崖地の崩壊など島内の各地区で大きな物的被害をもたらすとともに、地震発生から2～3分後には津波の第一波が来襲し、その後数波の大津波によって、特に震源域に近い島北端部のほか南端部や西海岸の集落が壊滅的状态となり、人的被害だけで死者172名、行方不明者26名・被害総額約664億円にも達する大惨事となりました。

当時、人口わずか4,000名半ばの島にあり、町の年間予算規模も約50億円というひ弱な財政基盤からして、受けた被害への復旧・復興の対策が町の未来を描くうえで、大きな問題・課題になるということがこの震災で初めて思い知らされることとなりました。



北海道南西沖地震による津波被害（共同通信社提供）



北海道南西沖地震による山地崩壊（北海道新聞社提供）

＜島を受け継ぎ、島をつくる。＞

～イクシュン・シリスタイル～

奥尻島には人々の心と暮らしを潤し、恩恵を与えてくれる奥尻ブルーの海、北限のブナ林、ワインや米を育む大地。自然と人、そして、少しおせっかいと言われるくらい、温かな人と人との関わりあいのある島ならではの時の流れがあり、他にはない固有の要素があふれています。

自然と人との長い関わりの中で生まれた島ならではの文化、自然的・人文的な資源を後世に守り伝え、活用することで奥尻に関わるすべての人が、固有の「しまのスタイル」を誇りに思い、そのスタイルに価値づけし、町内外で共有できる町づくりを目指しています。

また、島に「住むひと」、「来るひと」、「関わるひと」と様々なひとが関わり合い、支え合うことで、島の暮らしを支え、新しい価値を生み出す島づくりを進めています。



「奥尻フットパス」から奥尻ブルーの海を望む



奥尻島の特徴であるブナ林に触れ合える「奥尻21世紀復興の森」

2 脱炭素の取り組み

<離島がゆえに>

奥尻町は離島であるがゆえに海上輸送等で島外からの物資に頼らなければならない環境下であって、そのひとつとして石油製品のエネルギーがあります。発電所用や各家庭の暖房用としてその多くの石油製品は輸送コストや貯蔵コストが嵩むこと^{かさ}や荒天時の枯渇リスクがあることから地域内で産むことができる再生可能エネルギーの活用が求められています。離島では全国二例目となる地熱バイナリー発電による電力供給や森林資源が豊富なことから木質バイオマス燃料の供給が行われています。



離島では珍しい地熱バイナリー発電

<美しい循環型のまちづくり>

島で暮らす人にとっては当たり前前の自然や景観は、かけがえのない資源であることを島民一人ひとりの環境に対する意識を高めて、ごみの分別やエネルギー等の無駄のない利用、リサイクルの推進など、地域でできることを考え行動しています。

島にも地球にもやさしいエネルギーや島固有の資源を活かして、クリーンなエネルギーの生産・利用を進め、島で出るごみも行政や町民、事業者などの様々な主体と連携し奥尻島らしい自然の恵みを享受していただけるよう取り組みを進めています。



製材端材を利用してチップ燃料化

<四半世紀を超えての新たな挑戦>

奥尻町はあの北海道南西沖地震による未曾有^{みぞう}の災害から今年で31年を迎えました。

復興からのまちづくり以降の近年の取り組みでは漁期間散期でのトラウトサーモン海中養殖や道立高校を町立へ移管しての「まなびじま奥尻プロジェクト」展開の一環として「島留学」を全国から生徒募集をするなどの新たな島興しを進めています。



海中養殖されたトラウトサーモン「淡雪」(奥尻島でのブランド名)

<持続可能な島づくり

「サステナブル・アイランド奥尻」>

奥尻町では再生可能エネルギーの一層の活用と地球温暖化対策などへ対応するため地域脱炭素化への取り組みを進めようと、風況が有望とされる奥尻島沖合での浮体式洋上風力発電の可能性を検証するため環境省とともに調査を進めており、持続可能なまちづくりを目指すため「サステナブル・アイランド奥尻」と称

し、地域脱炭素社会の実現に向けて関係者と連携・協働しながら脱炭素によるまちづくり・しまづくりに取り組んでいます。

地熱・水力・太陽光・風力・木質バイオマスの再エネフルメニューで「ヒト・モノ・カネが有機的に循環するリズムを生み出し、人の絆と営みを育むことができるまちづくり」を実現するため持続可能な離島・奥尻島の挑戦が始まっております。



島内の多様な再生可能エネルギー（水力発電）



浮体式洋上風力発電の導入を検討している奥尻島沖海域



図 奥尻島の脱炭素社会のイメージ